

しがじん VOL.24 2021.12

SHIGAJIN

全障研滋賀支部発行 TAKE FREE!



サークル紹介 全国大会報告 学習会報告

わかばの会から 研究プロジェクト報告

全障研サークル紹介 マリーゴールドの会

全障研滋賀支部には、学校サークルをはじめとしたいくつかのサークルがあります。今回は今年度発足したマリーゴールドの会（通称：MG会）の紹介です。MG会では成人期障害者への支援をしているメンバーが、リモートで交流されています。興味のある方は是非、お気軽に全障研までお問い合わせください！

成人期障害者への支援をしているみなさんの日頃の悩みや利用者のキラリと光る出来事、どうしたらこの実践をより深められるか等々、ありのままが出せる会にしていこうと始めました。

第一回の参加者は6人、白石恵理子先生に助言者として参加いただきました。

二時間足らずの間に自己紹介と普段の思いを話しました。中でも、日頃の実践に関する悩みが多く、事情のわかりあえる関係だからか初対面とは思えない盛り上がりになりました。以下簡単に書いてみます。

- ①異なる発達課題を持つ人たちの集団づくりの問題、労働と療育
- ②職員の利用者への発達理解をどのようにすすめていけばいいか、職場づくり
- ③一歳前半くらいの利用者のこの一年間。コロナのこともあり、小さな枠組単位で行動した。結果としてその人の安心できる居場所ができ、新たなことに挑戦しようとする姿が見られるようになった
- ④家族の高齢化、本人の高齢化による問題

今後も引き続き、当面はざっくばらんにテーマを固定せず、思い付くままに話していきます。

第三回目は10月22日、今回もリモートで計10人の参加がありました。2つの事業所からのレポート報告を受けて交流を行いました。

2つの事例はいずれも二次元形成期の利用者についてです。年齢は異なるものの共通する悩みや課題が見え、とても興味深いとそれぞれ感想を持ちました。

始めの事業所からは、Aさん。好きな大人を手がかりに不安なことにも立ち向かおうとする姿、逆になかなか対人関係が広がりにくく、どうしても1対1になりがちだが、できるだけ集団で受け止めてきた。また、取り組みとしては利用者と職員が同じ対象物を通して共感できる場面や達成感が得られる、手応えを感じることができる場面を増やす（例えば、クッキングなど）などを繰り返して、安心して自ら手をのぼす場面や主体的に動こうとすることが増えてきた、という報告でした。Aさんは日中事業所とグループホームでの連携した取り組み。もう1つの報告のBさんはまだ若い利用者なので、母子関係の問題や生活基盤のサポートが必要だとわかりました。

たとえ、同じような発達段階にあるといわれる人にも行動面で見える現象だけでなく、その奥の生活背景や基盤をどう理解するか。取り組みの際に、職員の好き嫌い、単なる「相性」だと狭く捉えずに、互いのアプローチの仕方を学び合いながら、気持ちを寄せるコツや一緒になにか見える形のものを作り積み重ねていくことが彼、彼女らとの信頼関係や安心感、そして次への一歩につながるのではないかとアドバイスがありました。

MG会は今から新たに草津市のきらら作業所から4人の参加もあり、更に深めていけると思いました。きょうされんを通じて、またそのような輪を広げて行きたいです。

（くりもと ようこ）



第55回全国大会 静岡2021 報告

去る8月7日、全国障害者問題研究会の第55回全国大会（静岡2021）がオンラインにて行われました。昨年度の北海道大会はコロナ感染拡大のために中止となったため、初めてのオンラインでの開催でした。

大会は「風の祭典」の和太鼓演奏でスタートしました。息の合った太鼓の演奏や掛け声は、画面越しでも迫力たっぷりで、華やかなオープニングとなりました。越野全国委員長、清水大会準備委員長、障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会の新井たかね会長からの開会あいさつに続き、全国委員会からの基調報告・重点報告がありました。いずれも、コロナ禍や自然災害による苦しさの中での障害児者の発達保障や権利保



障はどうあるべきか、という視点で語られていました。基調報告・重点報告では、前号のしがじんでも特集した療育現場での個別サポート加算の課題をはじめとしてさまざまな情勢と課題が報告されました。厳しい情勢の中で、私たちには何ができるのか考えさせられました。人とつながりにくい今だからこそ、実践を語り合い、深めていくことが必要だと思います。それぞれの立場の人の「ねがい」をつなげていくにはどうしていくのか、改めて事務局でも考えていきたいです。

（にむら なつこ）

全体会では、吉田裕(ゆたか)さんの講演「戦争の記録」がとても心に残りました。とりわけ、最近コロナの医療崩壊寸前に話題になっているトリアージに相当する症状別の医師の治療の判断に「優良な兵役に戻る事が可能なものから治療に当たる」と平然と取説にかかっているというあたり、およそ人間の生命の尊厳とはかけ離れた当時の実情の記録に愕然としました。医師自身に葛藤はあったらうに。末端の兵士は虫けら同然に扱われている、ましてや障害者に対する当時の評価は本当にどんなものだったのだろうか、と震えるほどの怒りが拭えませんでした。調査が十分ではないが、明らかに戦争の酷さから逃れられない PTSD の症状を呈している元兵士がどれだけいるか、という報告も胸が鋭くえぐられるように感じました。

その後の久保山愛吉さん(1950年代、原子核実験によるピキ二礁の被爆を受けた人)の病状を気遣う娘さんの手紙や平和への祈り、メッセージのこもった合唱団の発表、「にじ」という歌声のリレーコーラスなど、リモートにしておくのはもったいないな、と思えるステキな企画でした。来年こそは兵庫大会に滋賀支部のみんなと行きたいなあと思いました。



（ペンネーム 栗 あんこ）

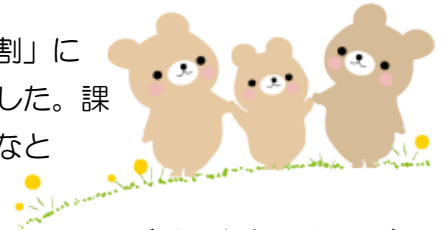


2日目 各分科会より

〈働く場の分科会〉

司会として久しぶりに参加しました。25人ほどの参加でしたが、2班に分けての分散会もあって、概ね参加者の発言は網羅できたのではないかな、と思いました。傾向としては、以前あれほど高工賃の保障を目指して議論されていたのに、コロナ2年目の影響として、そもそも仕事がない、バザーやまつり、地域交流がない。施設運営の基盤となるはずなのに、感染予防のために閉所すると運営が厳しくなるという矛盾を呈した状況、むしろ行事が激減したことで、逆に普段訪問することができない利用者に定期的に電話などで声をかけられるなど、違った角度からのとりくみが出されました。引きこもりケースの長期化を食い止めるために作業所の役割がとても重要で、息の長い丁寧な働きかけによって自信を回復している、地域からも感謝されているなどの報告もありました。生活づくりとしてのグループホーム運営、職員が勤務を掛け持ちして激務があり、なかなか長続きしない。利用者の高齢化、家族の高齢化や介護力の低下をどのように食い止め、支えるかといった悩みも出されました。

経済よりも「人としての繋がり」や「人生の豊かさを作り出す役割」に今は変わりつつあることが全国的な様子かな、という印象を持ちました。課題は山積ですが、全国の声がきけることがこれからの力になるのだなと改めて感じました。出された2つのレポートも良かったです。



(くりもと ようこ)

〈保育・療育の分科会〉

1つ目は、愛知の療育センターぽけっとの実践。泥の感触が苦手なかいくん泥遊びを「やらせよう」とするのではなく、かいくんの安心と本人が「楽しそう」「やってみたい」と思えることを大切にしておられるのが素敵でした。かいくんにどんな風に手応えを感じてほしいか、そのためにはどうしたら良いか、泥の上に透明なシートを敷いてみたらどうか…などなど、普段から先生同士が話し合うこと、かいくんが思わず「やってみたい」と思えるような雰囲気を作ることの大切さを感じました。

2つ目は、我が滋賀県大津市比良保育園の実践。「デッカイカエル、ツカマエタイ」というひろ君の願いが実現するように「自分でつかまえた」と感じられる工夫をし、その手応えから、ひろ君が友だちと一緒にする楽しさを感じるようになっていく姿が報告されました。友だちと思いがぶつかったときも、先生が判断してその場を収めるのではなく、お互いが気持ちを出し合い、思いの違いを感じられる経験を大事にしておられるのが印象的でした。

2つの実践に共通していたのは、「子どもの要求から出発する」「集団・仲間づくりを大切にする」ということ。発表後は、参加者間で改めてこのことの大切さを確認し合い、それぞれの職場に持ち帰ってまた明日から頑張ろう、と励まし合いました。



(あかほし かすみ)



全障研滋賀支部オンライン研修会

障害の重い子の思いを読み解き、主体性を育てるには



去る10月3日、リモートによる学習会を行いました。県内34人、県外から20人、計54人の参加がありました。秋晴れの青空、二人のお話を聞いて心も晴れ晴れ、軽やかな気持ちになった学習会でした。簡単ですが、以下のようにまとめてみました。

〈中野実践〉

Rくんの障害は心身ともにとっても重く、眼球の動きや脈拍の動静を介してしかコミュニケーション手段がない子どもでした。発達診断によると概ね3歳くらいの力はあるだろうとのことでした。わかるけれど体のせいではない。歯がゆい気持ちや自信のなさをどのように克服していくのか、体験の幅をどのように広げていけばいいのか、迷いながらの取り組みでした。

現在6年生になるRくんの一年生から五年生まで担任だった中野先生。彼の気持ちの表出を表現へと高め、自分の思いをこの人にならだせる、と信頼関係を築きながら深めていった繊細で丁寧な実践でした。まだ一年生だった頃、Rくんは母の付き添いを保障してもらい、学校に通いました。当時は不安なことがあるとすぐに心拍数が上がり、顔を真っ赤にして反応する姿が見られました。いざ慣れたらと母の付き添いをなくしたときの不安そうな顔、一年生らしい泣き顔でした。

そんなRくん。2年生のときに再手術。心肺停止になり、以前のような表情や理解は困難だと医師から告げられます。信じられないと母。回復期にも訪問教育を続けながら、これまでと変わらない接し方で、彼の意味や思いを引き出そうと努力を重ねます。スライムづくりでは、青ではなく赤のほうが良かったな、と「じいっと見つめる」という形で自分の思いを表現しました。

また、ズボンの下のタイツが下がったままで気持ち悪かったこと、直してほしいと伝えることができたこと、自分の気持ちをこの人の前でなら伝えることができる、と信頼関係のある先生には感じたようでした。いくつかの授業、休み時間の過ごしを通して、息を吹く行為を音に見立て、独自の個性あるカラオケもできるようになりました。その後の5年間の成長を通して確信を持てるようになっていったことが、つぶさに報告されました。

言葉はなくても伝えたいことがある、この人になら何でも話せる。こういった経験こそが、次の「知らない誰かにでも自分の気持ちをつたえることができる」ことにつながるのではないかとあとでまとめられました。

〈原田文孝先生の講演〉

まずはじめに、中野実践をどのように見るかについて何点かにまとめて述べられました。原田先生自身もずっと寄り添って実践されている遠山くんの事例を具体的に上げながら、表出でしかなかったR君を→表現→表現活動または新たな知らない人との表現のやりとりへ、と発展していくプロセスがあることを示してくださいました。

その後先生の実践を聞きました。ケアをされている遠山くんのお母さんの素朴な疑問や悩みに答える形で「遠山くんは決して一人で何かをしたいのではなく、辛いのは目的のある生活がないことではないか」と参加者にメッセージを投げかけてくださいました。この言葉は本当に深いと感じました。ともすれば、一人でできることを究極の目標にしたがり、強度行動障害の利用者やダウン症の利用者についても「いつまでも介助者がいなくても」

と自立の意味を狭く捉えがちでしたが、関係をつくるという意味では十分自立に向かおうとしているんだと考えれば良いとお話してくださり、参加者からもこのメッセージがとても記憶に残ったと感想が寄せられました。本当に辛いのは「目的のない生活」。入所施設や高齢者の老人ホームにおいても考えさせられる耳の痛い言葉です。

福祉の乏しさを容認するような社会ではなく、介助者も豊かな生活や休息が保障される、そんな社会づくりをすべきだと改めて感じました。NPO 法人を立ち上げ、遠山くんの成人期の暮らしを支えている原田先生も、彼とともにドラム缶の露天風呂を楽しむ、豊かで明るい時間と空間を作っておられるんだと元気をまたもらうことができました。

テーマが堅く思え、始めは参加者も身構えていたかもしれませんが、この学習会に参加できなかった人は非常にもったいないな、と思いました。中野先生、原田先生。ありがとうございました。

*滋賀支部もコロナによる学習の機会や交流困難な中、来年2月にも企画を予定しています。皆さんからのご要望やご意見、お待ちしております。
(くりもと ようこ)

新たな研究プロジェクト「障害の重い人への実践と発達の研究」のスタート

研究部長 黒田吉孝

全障研滋賀支部では今年度後半の研究として、「障害の重い人（子ども・成人）への実践と発達の研究」をスタートさせることにしました。「障害の重い人」に関する滋賀支部の研究プロジェクトは、3年前に、教育権保障運動の滋賀県の歴史（養護学校教育完全実施に至る福祉分野と教育分野等での発達保障の歴史）をテーマにし、これまで『障害者問題研究』等に公表してきました。この研究は、現在も、続いています。「障害の重い」子どもは教育実践の「宝」だと考え、教育権保障に取りくんできた、関係者の運動の歴史をまとめてきました。

「障害の重い人」の教育は、長期にわたる関係者の粘り強い運動によって築かれてきた歴史をもち、今日に至りました。今回は、このような歴史に学びながら、「障害の重い人」への教育と支援に焦点をあて、滋賀県での今日的な到達点と課題について、就学前から成人期まで幅広く対象を広げ、発達保障の視点を大切にしながら、研究を立ち上げることにしました。

どこから研究をスタートさせるか、どのように進めていくか等、考える必要がありますが、支部事務局では、次のように考えました。

「障害の重い」人という場合、「どんなに障害が重くても」という思いがこめられており、また、障害の種別や程度に関係なく、あらゆる人の権利の実現を大切にしてきました。そうした視点を今後も堅持しつつも、実践研究を進める上では、発達や障害の程度についても考慮していく必要があります。

今回のプロジェクトでは、「障害の重い人」の理解やイメージについて、教育や支援に関わっている人の捉え方を整理し、共通理解を深めることからスタートしたいと考えました。それぞれ実践に関わっている人の「障害の重い人」への受けとめ方を大切に、実践への思いや考え等をとらえることが大切と考えました。

その後、「障害の重い人」への教育や支援の独自の内容や方法の検討（教育や支援の目標で何を大切に、目標と教材や評価との関係、個の発達と集団との関係等）、実践と発達理解における生活年齢の配慮、具体的実践の検討と実践を通じた障害と発達の理解が考えられます。研究テーマに応じた学習会も考えたいと思います。

「しがじん」や滋賀支部ホームページを活用し、適宜、取り組みを伝えていきたいと思っています。プロジェクトへの参加を含め、協力お願い致します。





わかばの会と「就学と特別支援教育を考えるつどい」



34年前、当時養護学校への進路選択をすると、地域の子ども達との交流やつながりが殆ど無かった時代でした。就学前に培った地域の友達との交流が継続的に持てるような進路選択の幅が狭い中、当時鳥取大学附属養護学校が実践していた『養護学校に行きながら地域交流する』ことに関心を持ち、鳥取大学の渡部昭男先生に講演していただいたのがきっかけとなり、わかばの会が発足されました。

その後、色々な進路選択があって良い。親と子どもの状況によって一人ひとりがどうしたら良いか考えるために、保護者が呼びかけ、生の声を聞こうと学齢期の保護者同士が集まり「就学と特別支援教育を考えるつどい」が開催されました。そこに至るまでの最初の働きかけ方等は親の願いを支えてくださった大津市の発達相談員であった松原先生をはじめ、沢山の発達相談員や保育士の先生方が仲間を集めてくださいました。先輩保護者の皆さんが小学校・部を卒業していく中で、運営スタッフは次の世代へと引き継ぎをし、現在に至ります。

今年は7月22日(木・祝)に、初の試みとなるオンラインで「就学と特別支援教育を考えるつどい」を開催しました。保護者36名、教員・福祉関係の方々17名と沢山の皆様にご参加頂きました。共催の大津市障害児者と支える人の会西川会長にもご参加、ご挨拶していただきました。「つどいに参加し、子どもの為に悩み考えていること。それが出来ている時点で大丈夫。進路決定の判断に『間違い』ということは無いです。」とのあたたかいエールに参加して下さった皆様、スタッフ共に勇気の湧く言葉となりました。

午前には各支援学校・公立学校の支援・通常学級の先輩保護者の方々に就学に向けてのこと、現在の様子などを話していただきました。午後からは各学校の先生方に学校の特徴等を写真や表を使いわかりやすく説明していただき、また事前に参加者より募集した質問を反映し答えていただきました。

新型コロナウイルスの流行前は毎年7月後半頃に風の子保育園に場をご提供いただき、保育ありでご参加いただく形をとっていましたが、コロナ禍中でも就学に向けて悩まれている方に必要な情報をどう届けばいいか…スタッフで何度も会議を重ねました。昨年からは始めたFacebookでの発信もそのひとつです。今後もひとりでも多くの方々に「ひとりじゃない。」と提供いただけるような保護者の方に寄り添える会にしていきたいと思っています。

(こした まりこ)



PONTAの 10 ゆるーい日々

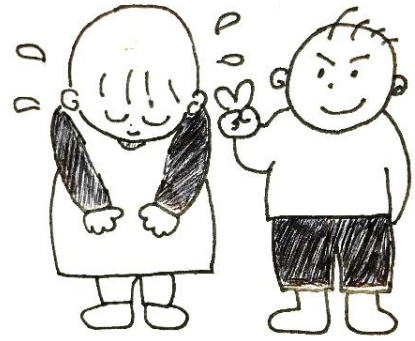


う・うれしいです

PONTAの 11 ゆるーい日々



たぬきや=ポンタの通う作業所



母 ぽんた (20)

Pontaは、ダウン症の男の子。三人きょうだいの末っ子。ついにハタチになりました★でも、相変わらずのゆるーい毎日です。

最近の口癖は、「俺は大人だから!」。レストランではジュースじゃなくて紅茶を頼んでみたり、ハンバーグじゃなくてお肉の煮込みにしてみたり…と本人なりの大人を追求中です^_^;



..あとがき..

にむらです。相変わらずリモートの事務局会議の時にもりもり晩御飯を食べています。最近は事務局員の皆さんにメニューを聞かれるようになったので、会議の日は張り切ってお料理するようになりました(^o^)



今回の表紙は、駒井和夫さん(障害者福祉サービス事業所おおぎの里)の作品です。以下、職員の皆様よりコメントをいただきました。

まだコロナで世間が騒がしくなる前、シンガポールに行った思い出の写真を絵にしました。キラキラ光るテープやスポンジを使って、バックの彩りに変化をつけています。水をずっと出しているマーライオンが一匹では寂しいと思って隣にもう一匹描きました。

前回の金魚の共同制作が表紙絵に決まり、みんなでお祝いしました。たくさんの方が僕たちの絵を見てくれて感想も聞き、元気が出ました。「マッOSHェイクで乾杯」をしました。「初めてのんだ!」「若いときはよく飲んでた!」と大盛り上がり。残暑の疲れも吹っ飛びました。「次は、ハンバーガーをみんなで食べよう!」もう次の企画が決まりました。このようなきっかけを作ってください、本当にありがとうございました。(おおぎの里の絵画活動メンバーと生活介護班より)